

明治初頭から、産官学の様々な分野で日本の近代化を支えたお雇い外国人。
世界各国から招聘された彼らの功勞によって最先端の技術、思想が奔流となって流れ込み、
日本は劇的な変貌を遂げる。それは土木、建築分野においても例外ではなかった。
この国の礎を築き、いまなお威光を放つ二つの巨星の足跡に触れる。

偉人伝

the life of a great person

土木
建築

VOL.13

建築

「一八五二年～一九二〇年」

ジョサイア コンドル

Josiah Conder

西洋建築に
和の伝統をちりばめ
独自の概念を生む



ジョサイア・コンドルは1852年、イギリスのロンドンに生まれる。ロンドン大学で建築を学び、1876年に王立建築学会の若手登竜門ともいべきソーン賞を受賞し、建築家として頭角を現す。明治政府の工部省と5年間の契約を結び、1877(明治10)年に来日した際は24歳だった。

上野に都会の真ん中とは思えない閑静な庭園がある。三菱財閥の総帥岩崎彌太郎の長男、岩崎久彌の本邸だった旧岩崎邸庭園だ。約5,000坪の敷地に洋館、撞球室、和館が現存する。洋館の設計は、工部大学校(現東京大学工学部)の教官として招聘され、鹿鳴館を手掛けたコンドルによるものだ。その他の作品には上野博物館、ニコライ堂、横浜山手教会などがあり、その多くが和と洋の融合を体現している。のちに顧問に就任する三菱関連の作品も多く、日本初のオフィスビルといわれる三菱一号館の建設は単なる建造物の建築に留まらず、オフィス街という都市空間の創造を見据えたプロジェクトだった。

1920(大正9)年、麻布の自邸で世を去ったコンドルの功績のひとつに人材育成を通じて日本近代建築の扉を開いたことが挙げられる。工部大学校教授のコンドルのもとからは辰野金吾、片山東熊をはじめ、そうそうたる建築家が羽ばたいている。

土木

築港と河川改修で
近代土木の扉を開いた
インフラ整備の父

ヨハネス デ・レーケ

Johannis de Rijke

「一八四二年～一九一三年」



ヨハネス・デ・レーケは1842年、オランダに生まれる。明治初頭、政府はオランダから水工技術者を招き、荒廃した河川、港湾の整備、改修に着手した。31歳の職人、デ・レーケもその一員として1873(明治6)年に日本の地を踏む。当初は低位の4等工師にすぎなかったが、その後30年にわたって全国で大きな功績を残すことになる。来日時の月給は300円だったが、帰国に際して政府が支払った退職金は5万円、「日本の土木の基礎を築いた」として更に勲二等瑞宝章が授与された。デ・レーケに対する敬意、顕彰を物語っている。

デ・レーケの功績は淀川の改修、大阪、三国、三池といった基幹港湾の築港と枚挙にいとまがない。木曾三川改修もそのひとつだ。長良川、木曾川、揖斐川の木曾三川は複雑に合流、分流しており、洪水のたびに甚大な水害を引き起こしていた。これを完全に分流し、洪水を防御する河川改修事業だ。デ・レーケは「治水は治山にあり」の理念のもと、流域とその内陸部を綿密に視察し山林保護、砂防工事も提案している。

この改修の後、100年間で水害が発生したのは1976(昭和51)年のいわゆる長良川水害だけだ。それも設計上の瑕疵ではなく、たぐいまれな自然現象に起因するものであることが証明されている。